

感想文部門 銅賞

「おべんとうの向こうに何がみえる？」(江口加奈・岐阜市)

[おすすめしたい本:阿部了・阿部直美『おべんとうの時間2』(木楽舎)]

人のお弁当の中身をじろじろ見るなんてお行儀が悪い。でもだからこそそのぞきたい。そんな欲望を満たしてくれたのが「おべんとうの時間(2)」。私は体調を崩したことをきっかけに、お昼ご飯を外食からお弁当へ切り替えたのだけれど、最初は作るのに苦労した。玉子焼きを入れた後は何を入れていいのかわからない。ああでもない、こうでもないとできあがったのは中身がスカスカのお弁当。今はそれよりは上達した(と思う)けれど、入っている物はマンネリ。参考に人のお弁当をじっくりのぞいてみたい。

本書は右ページに人物のフルショット写真。左ページにその方のお弁当写真、さらにページをめくるとインタビュー記事。合計三十九名のそれが丸々一冊続いている。

一番の衝撃を受けたのは、ご飯の上に塩ザケがドーン！とあるお弁当。その他のおかずも全てご飯の上に乗っている。お弁当の主は線の細い女性。あらー、こういう発想は私にはなかったわ、と感心。

次にまたビックリ。ドカベンにウインナーが四本ぎゅうぎゅうに入っている！こちらは若い男性家具職人さんのお弁当。これくらい食べないとおなかが持たないのかしら？ 作り方も「着替えている間にフライパンに火をかけてウインナーを入れておく。途中で卵を割って入れ、また放っておく」とのこと。なんて合理的で肩の力が抜けたお弁当なんだろう。すっかり感心してしまった。

私は、お弁当はこうあるべきという固定観念に捕らわれていた。だって既成のお弁当以外は自分の母のものしか知らないのだ。私の母のお弁当は、おかず同士はアルミホイルカップできっちりとわけていたし、同じ食材を複数使うことはなかった。父が偏食の肉嫌いだったため、煮魚や煮物がメインの茶色い地味なお弁当だった。(今でこそ毎日お弁当を作ってくれたことに感謝しているが、高校生のころは星形のポテトに憧れた！)

職業も年齢もバラバラの人のお弁当写真が続くのだけれど、卵料理は圧倒的に人気。ほぼすべてのお弁当に入っている。あとは果物。真っ黒な船長さんのお弁当にさくらんぼが三つ。かわいらしくて頬が緩んでしまう。インタビューも面白くて、ネイチャーガイドやウイスキー製造技術者の方の仕事の話も興味深い。一緒にお弁当を食べてうんうんと話を聞いているような気持ちになる。本当にさまざまな人がいて、仕事があって、お弁当が存在していた。

心に残ったのは東日本大震災を被災された後の男性の理容師さんの、おにぎりが二個だけのお弁当。「弁当だと中身を考えなくちゃいけないし、朝作るのも大変でしょ。うちのやつに負担がかかるなあって思って、だったらおにぎりにしようって」

この文章を読んだ後、もう一度おにぎりの写真を見た。グッときた。まさかお弁当の本でこんな気持ちになるとは思わなかった。